

1 研究主題

「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」

2 研究設定の理由

これまで本校では指導と評価の一体化を目指し学習評価の充実を図るための取り組みとして評価規準の妥当性の検証を目的とした授業実践を行ってきた。3年間の取り組みの中で育成を目指す資質能力の3つの柱を意識した単元計画やその評価を行うこと、授業づくりの際に大切にすべきことについて私たち教師の意識の変化へとつなげることができた。教師がチームとなり「何が身についたか」を複数の視点で確認し授業づくりを行うことができ、授業改善や指導改善へとつながったことは大きな成果であった。

今年度の研究主題として教師へのアンケートを行った。その中で様々な意見があった。その中で上記の取り組みを経た上での学校教育目標の具現化に向けた新たな実践研究を行っていくことが必要であると考えた。

本年度の山梨県立やまびこ支援学校教育計画に示された指導重点は

- (1) 基礎的・基本的な知識及び技能の習得と情報活用能力の育成
- (2) 自ら考え、判断、表現する力の育成
- (3) 学びに向かう力、社会と関わりながらよりよく生きるための人間力の育成
- (4) 豊かな心と健やかな体の育成

の4点とされている。今年度初めの職員会議にて校長よりその中で特に「情報活用能力」とはどのような力を指すのか、また目指す児童生徒像とはどのようなものかについて考えていってほしいとの話があった。

情報に関する教育については学校教育の中において以前よりその取り込みについて必要性が言及されている。「情報活用能力」とは令和元年12月「教育の情報化に関する手引き」によると「世の中の様々な事象を情報との結び付きとして捉えて把握し、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくための必要な資質・能力」とされている。また、予測困難な未来社会を切り拓くには汎用性の高い資質・能力の育成が不可欠であることをコロナ渦で実感したところであった。平成28年12月中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」において「言語能力」等と同様に「教科を超えた全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力」の一つとして掲げられ、「教育課程全体を見渡して組織的に取り組み、確実に育んでいくことが重要である」と学習指導要領等に反映されていくように提言され、実施されていることは周知の通りである。文部科学省「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告本文（令和3年1月）Ⅳ ICT利活用等による特別支援教育の質の向上」において「1 特別支援教育におけるICT利活用の意義と基本的な考え方 ○ICTは、障害の有無を問わず、子供が主体的に学ぶために有用なものであるとともに、特別な支援を必要とする子供に対しては、その障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じて活用することにより、各教科等の学習の効果を高めたり、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克

服するための指導に効果を発揮したりすることができる重要なものである。また、合理的配慮を提供するに当たっても必要不可欠なものとなりつつある。」としている。また同会議にて「2. ICT活用による指導の充実と教師の情報活用能力（ICT活用による指導の充実）○ 指導内容や指導方法の充実の観点からは、ICTは、例えば、タブレットを使った授業などで、自分の考えをタブレットに書いて自らの意見を視覚的に表現しやすくなるなど、集団学習における個に応じた支援に生かすことができる。将来的には、例えば、障害のある子供の個々の教育的ニーズに応じた適切な指導の観点から、教材等の使用状況を自動的に記録し、取組の過程や解答状況等をデータとして蓄積することにより、エビデンスに基づいた指導の質の向上を目指すことも期待される。こうした活用の前提として、子供たち一人一人の障害の状態等や育成を目指す資質・能力、学習の習得状況等と照らし合わせながら、どのようにICTを活用した授業を実施していくことが適切なのか、ICTを活用した授業の在り方を引き続き検討していく必要がある。」と指摘されている。このように特別支援教育においてもICT利活用を含めた情報活用能力の育成について研究と実践を重ねていく必要があると考える。

さらに、育成に係る力について、文部科学省「教育の情報化の手引き追補版（令和2年6月）」の「第2節 学習の基盤となる資質・能力としての情報活用能力 1. 資質・能力の三つの柱と情報活用能力」の中で「これまでの「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の3観点8要素だけでなく、各教科等において育むことを目指す資質・能力と同様に、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱によって捉えていくことが提言され、以下のように整理された。」としている。

○知識及び技能(何を理解しているか、何ができるか)

情報と情報技術を活用した問題の発見・解決等の方法や、情報化の進展が社会の中で果たす役割や影響、技術に関する法・制度やマナー、個人が果たす役割や責任等について、情報の科学的な理解に裏打ちされた形で理解し、情報と情報技術を適切に活用するために必要な技能を身に付けていること。

○思考力、判断力、表現力等(理解していること、できることをどう使うか)

様々な事象を情報とその結びつきの視点から捉え、複数の情報を結びつけて新たな意味を見いだす力や問題の発見・解決等に向けて情報技術を適切かつ効果的に活用する力を身に付けていること。

○学びに向かう力、人間性等(どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか)

情報や情報技術を適切かつ効果的に活用して情報社会に主体的に参画し、その発展に寄与しようとする態度等を身に付けていること。

(「教育の情報化の手引き追補版」より抜粋)

また、文部科学省委託事業「次世代の教育情報化推進事業『情報教育の推進等に関する調査研究』（以下、IE-School という。）を手掛かりに、情報活用能力に関する指導項目の分類や系統を整理した例示がされている。以下にその図を示す。

分類		
A. 知識及び技能	1 情報と情報技術を適切に 活用するための知識と技能	①情報技術に関する技能 ②情報と情報技術の特性の理解 ③記号の組合せ方の理解
	2 問題解決・探究における 情報活用の方法の理解	①情報収集、整理、分析、表現、発信の理解 ②情報活用の計画や評価・改善のための理論や方法の 理解
	3 情報モラル・情報セキュリ ティなどについての理解	①情報技術の役割・影響の理解 ②情報モラル・情報セキュリティの理解
B. 思考力、 判断力、 表現力等	問題解決・探究における 情報を活用する力 1 (プログラミング的思考・情報 モラル・情報セキュリティを 含む)	事象を情報とその結び付きの視点から捉え、情報及び 情報技術を適切かつ効果的に活用し、問題を発見・解決 し、自分の考えを形成していく力 ①必要な情報を収集、整理、分析、表現する力 ②新たな意味や価値を創造する力 ③受け手の状況を踏まえて発信する力 ④自らの情報活用を評価・改善する力 等
C. 学びに向かう力・ 人間性等	1 問題解決・探究における 情報活用の態度	①多角的に情報を検討しようとする態度 ②試行錯誤し、計画や改善しようとする態度
	2 情報モラル・情報セキュリ ティなどについての態度	①責任をもって適切に情報を扱おうとする態度 ②情報社会に参画しようとする態度

また、本校でも指導主事を招聘してのICT授業研究会を教務部の計画のもと行っており、そこで山梨県教育委員会特別支援教育・児童生徒支援課より山梨県特別支援教育における「ICT活用能力実態チェックシート（令和6年7月第3版）」が示されている。

「情報活用能力」の捉えについては以上のように山梨県教育委員会の体系表など、様々な文献や資料が示されている。その捉えについては多岐にわたり、煩雑となるため、本研究における情報活用能力について今一度考えていく必要がある。そして学習のねらいを達成するために必要な情報活用能力の育成場面を蓄積していくことで具体的な手立てについて考えていきたい。各学部の学びの場面を共にリンクさせながらこれまで取り組んできた活用場面と今後の授業実践により活用場面を蓄積していくことで本校の児童生徒のそれぞれの学部段階、発達段階において育成すべき情報活用能力がより明確化していくのではないかと考える。

これらの国の動向や時代の流れを受け、本校においてもICT利活用のみにとどまらない、情報活用能力の育成について、それを着実に児童生徒に身につけていけるような授業実践を重ねていくことが必要であると考え。特にタブレット端末等の活用が難しい実態の児童生徒への支援、学習場面ごとの様々な「情報」を効果的に活用することができるようになるか考えていけるとよい。それにあたりまずは児童生徒にとって必要な「情報活用能力」とはどのような力なのかを考察していきたい。「言語能力」と同様に発達段階や障害の状況によっても捉えが違ってくるであろう。本研究では授業実践を通して明らかにしていくため学部ごとの研究としたい。本校児童生徒の各学部の「情報活用能力」の捉えを明らかにしたのち、育成に有効な、授業における手立て、題材、支援方法等をPDCAサイクルにて考えていきたい。

3 研究目標（2年計画で研究を行う）

- （1）本校児童生徒に必要な情報活用能力はどのようなものか、それを育成するにはどのような方法があるか実践を通し、検証していく。（1年次）
- （2）本校児童生徒に必要な情報活用能力を育成するために必要な手立てについて授業実践を通し、児童生徒の変容を観察、考察していきながら育成を目指した授業づくりについて明らかにする。（2年次）
- （3）授業研究を通して、授業の質や教職員の授業力を向上させる。

4 研究内容・方法

- （1）本校児童生徒に必要な情報活用能力に関する考え方や捉え方について既存資料、実践成果等を基に整理を行いながら教師間の認識を揃える。
- （2）情報活用能力を育成するための授業づくりについてPDCAサイクルにて実践する。また、実践にあたり（1）で示された理論との双方を往還させながら研究を進めていく。

5 研究組織

- （1）各学部及び寄宿舎での研究会（月1、2回程度の校内研究日）

6 研究計画

本研究は2年計画で行うものとし、令和6年5月から令和8年3月までの2年間を研究期間とする。

【令和6年度（1年次）】

	日にち	内容
全体研究会①	5月9日（木）	今年度の校内研究の方向性、計画等の提案、意見交換。
研究日①	5月16日（木）	学部研究テーマ、研究計画・内容の確認など
研究日②	5月27日（月）	グループ別計画による実践
研究日③	6月6日（木）	グループ別計画による実践
研究日④	7月23日（火）	グループ別計画による実践
全体研究会②	8月23日（金）	中間報告
研究日⑤	8月28日（水）	グループ別計画による実践
研究日⑥	9月20日（金）	グループ別計画による実践
研究日⑦	11月19日（火）	グループ別計画による実践
研究日⑧	12月25日（水）	グループ別計画による実践のまとめ
研究日⑨	1月17日（金）	学部まとめ、来年度に向けてのアンケート
全体研③-1	2月5日（水）	実践報告
全体研③-2	2月6日（木）	実践報告
全体研④	2月17日（月） 職員会議終了後	今年度の課題と成果、来年度へ向けての方向性の意見交換

寄宿舎は別途研究日を設定する。